

## 七 アヤメ石

讃岐の名石として古くから知られたものにアヤメ石がある。

最も古い文献と思われる三代物語〈明和五年・一七六八〉には「草葉石」の名がつけられている。

白鳥町の与田山：そこにタライダニ盥谷という所がある。

虎丸山の東南に当る峡谷で、大盥、小盥と呼ぶ大小の瀧壺がある。

この界限は今もアヤメ石の多産地であるが慶長元和の昔、この峡谷に無偏仙人という、奇人が住みついた。

髪はくしけずらず、夏も冬も、汚れたままのカタビラ一枚、それに縄の帯、腰には鎌をぶらさげ、木の実、草の根を食い、修法するという、いわば木食上人だった。

この奇人：無偏仙人の修法した岩：笠崎の岩という：その岩下に「草葉石」



が出る……と三代物語の著者増田休意は記しているからこの「草葉石」……それはアヤメ石の古い呼称と考えてもよいであろう。

石面に太く描かれた黒絵のような草の葉の紋様から……からすると、確かに「草葉石」は当を得た呼び名でもある。

これが後には、愛石家達が、燕子花石（カキツバタイシ）、菖蒲石（ショウウブイシ・アヤメイシ）とか、オモト石などの名で呼ばれるようになっていく。太い筆に墨をつけてはねた様な紋様なので、カキツバタ、アヤメ、ショウウブ、オモトの類に見えるのも当然である。

讃岐名勝図絵（安政四年梶原藍水著）には、燕子化石とし、大内郡与田山のタライ谷から出る大内郡の土産品として記載している。

同じ頃丸亀藩で編集した西讃府志には、菖蒲石として菖蒲の紋あり、彫るが如し、中には花をつけたるもあり。今はいと稀となり……とあつて、菖蒲石と書いている。

もつと古いところでは、寛政年間、進藤蘭石齋の書いた讃岐廻遊記……これには



与田山附近から出る、この石を矢張り菖蒲石としている。

これらの文献では燕子花石、菖蒲石という漢字が使用されている。

さて、燕子花石は確かにカキツバタイシと読むべきだろうが、菖蒲石はうっかりシヨウブイシとも読むであろう。しかし、これはアヤメ石と読むべきもので、昔はアヤメを菖蒲と書いた。西讃府志も讃岐廻遊記も、アヤメ石と呼ぶところを漢字で菖蒲石と書いている筈である。

して見るとアヤメ石のことをシヨウブ石というのは菖蒲石の読み方の違いから生じたともいえる。しかし、紋様からは同じイチハツ科の植物に見えるので菖蒲石を、シヨウブ石と読んでききも決して悪くはあるまい。

ところでこの菖蒲石は、昔の人もアヤメが石になった……つまり化石と考えていた。雲根志にも化石の部に入れている。

しかし、与田山の産地では、巨勢金岡が岩壁に絵をえがいた、という伝説があった。



讃岐廻遊記に、「…巨勢金岡、石上に書きしより、かくの如くあらわるなり…」とあるのも、土地の人の俗説を聞いて書いたものであろうが、巨勢金岡が、この与田山の地に来て、住んでいたという、金岡屋敷跡までが残っている。ともかく与田山のアヤメ石にまつわる、伝説といえよう。

それはともかく、後、明治の世になるお、古生物学者どもが色々と研究したもののだが、化石とはいいいながら、なかなかこのアヤメの実体はわからなかった。ともかく、昔の人が考えたアヤメのような植物ではないことはわかって、さて何かとなると矢張り解明出来なかった。ただ「おそらく藻類の一種であろう」と一応、学名をフコイド（藻類に似たもの）という意味の名をつけたが、このフコイドの学名がその後長く続いた。

ところが、実はこれが「古代アマモ」と呼ぶ、海の藻類であり、アマモの先祖系の植物であることを明らかにしたのは京都大学の郡場寛教授で、教授の詳細な研究の結果であった。讃岐の名石、アヤメ石もこれでその謎が解かれ、古代アマ



モの化石として世に知られるようになったのである。

アマモは浅海に自生するもので、葉は細長い宿根草……つまり多年草である。

その先祖の古代アマモの花は念珠状に生じしかも葉身に並行し、アヤメのように花茎を長く出して大きく開花しないということ、時に、アヤメの花に見えるものは、葉が折れて何重にもかさなったりした部分や軟マンガンの附着などによる結果である。

何分化石といっても、他の顕微鏡的なものと違って、アヤメ石は大柄の長い葉……それが墨絵のように石面に広くあらわれるので、大塊のものでなければ、研究や鑑賞には向かない。

坂出の鎌田博物館には立派な大塊のアヤメ石が置かれている。

私が最初に古代アマモの化石に接したのはこの鎌田の大きいアヤメ石だった。

鉍石ではないから母岩といつてはおかしいが、古代アマモの化石を包含する岩石は和泉砂岩である。



讃岐の南方に連らなる、阿讃山脈は、白亜紀の海底で堆積された海成層から出来ていて、これを和泉砂岩層群と呼ばれ、粘土質の固まった頁岩ケツガンや礫岩なども含んでいるが主要な岩石は、この和泉砂岩から出来ている。

そこでわれわれが日常見る、讃岐の川の礫や、田畑の下から出る石ころの大部分は、阿讃山脈から流れて来た、この和泉砂岩の石礫なのである。したがって、アヤメ石の岩塊そのものは、川原の石も同然で飾りになるような美しさや雅致はない。

ただ、その紋様の珍しさを愛石家はめである。

さて、その産地は和泉砂岩層の阿讃の山ともいえるが、今までに採取されたことの知られている所は引田町の川股附近（旧相生村）、白鳥町の与田山（旧福栄村）、塩江村、琴南町の美合、仲南町の新目、財田町などを中心とした界限：などで、阿讃の山麓にあたり、各河川の谷口から、すべて発見されている。

白鳥町の湊川：そこをさか上って、与田山やその奥の入野山ニウノヤマ部落あたりに、



一度私は遊山に出かけたことがあった。その時、細い支流の谷間におり、犬連れでいた孫が何も知らずに拾った小片の石ころの中に、アヤメの花といわれた部分、模様のかさなりあった部分：それが珍らしくも、はいつていた。

このあたりの川原にころがる石には黒いアヤメの紋様の一部がついているものが多く見かけられた。流石にアヤメ石の多産地であることを物語っているようだった。

西讃府志に新目村の百々川とあるが、これは財田川の上流で新目では白石川というが、その白石川から出ている。

以上の外に、財田町の猪鼻や、大野原町の五郷辺からも見つかっていると書いている。

昔、日本一の石の蒐集家近江の山田石亭：雲根志の著者は、讃岐のアヤメ石を塗箱の台に載せ諸国の奇石の中でも特に代表的なものとして来訪者の閲覧に供していた。



その銘には讃州産、燕子花石と誌していた東海道名所図絵に、それを模写した絵が載っている。それを見ると、台の下の方から、墨絵のような葉が数ヶ所から出て、その中一つは、一もとのおもとのように伸びている。おそらく与田山のものであろう。